

今年は「韓国併合」と大逆事件から百年の節目。天皇暗殺計画を口実に幸徳秋水ら二四人への死刑判決事件は、思想弾圧を狙ったフレームアップであった。百年後、平和や人権擁護の先達として名誉回復を目ざす人びとがいる。

大逆事件の志を継ぐ二河通夫

ジャーナリスト 西村 秀樹

大逆事件から一〇〇年

熊野の緑は濃い。照葉樹の木々に勁い生命力がみなぎる。新宮は人口三万人余り、紀伊半島南部、和歌山、奈良、三重に広がる熊野の扇の要に位置する。大阪の天王寺駅を出発した特急くろしおは、四時間かけ新宮駅に着く。改札口を抜け、駅東側の踏切を渡り、北に徒歩三分、道路脇の春日町内公園の一面に、ほぼ成人の背の高さの石碑が屹立している。作家中上健次が生まれ育ち、「路地」と表現した地域だ。

石碑の上部にしゃがんでヒザを抱えた男のレリーフ、す

ぐ下に「志を継ぐ」との文字が凛と並ぶ。左隣の黒い大理石には、銘文を刻む。

「一九一一年、この熊野の地で『天皇暗殺を企てた』とする大逆事件のため、六名が犠牲になった。

大石誠之助／成石平四郎／高木顕明／峯尾節堂／成石勘三郎／崎久保誓一

太平洋戦争後、この事件は自由思想弾圧の国家的陰謀である事実が判明し、かれらはその犠牲であった」

大逆事件（幸徳秋水事件ともいう）では二六人が大逆罪で起訴され、うち二四人が死刑判決を受け、半数の一二人が一週間後に処刑された。特赦で減刑された生き残り一二



大逆事件で犠牲者6人を出した新宮に、いま犠牲者の「志を継ぐ」との顕彰碑が建つ

人のうち五人は獄死した。

六人の犠牲者を出した新宮に、二〇〇三年、この石碑を建てたのは、「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」。その会長が、今回の主人公、二河通夫である。

私が新宮に通うようになってかれこれ一〇年余りになる。きっかけは、新宮六人の犠牲者の一人、高木顕明との出会いである。

私はこの時期、日本最大の宗教団体の一つ、浄土真宗大谷派（東本願寺）で部落問題に正面から取り組む、一人の僧侶を知る。三姉義光^{みきぎこう}という。当時、私は朝鮮戦争（一九五〇年から五三年）への日本国内の反戦運動を調べ著書にまとめた。血のメーデー事件などと並ぶ日本の戦後三大騒擾事件の一つ吹田事件のことだが、『大阪で闘った朝鮮戦争』吹田・枚方事件の青春群像』岩波書店）、その吹田事件で首魁として起訴された二人のうちの一人が三姉省吾という。武装路線を採用していた当時の日本共産党大阪府委員会の軍事委員会幹部で、調べを進めるうち、三姉省吾の甥・三姉義光に出会い話を聞いた。義光は真宗大谷派同和推進本部の事務部長、つまり真宗大谷派による部落差別をきちんと総括し人権を擁護する運動の最先端にいた。

その真宗大谷派は同和推進本部や教学研究所が中心になって、近世の部落差別や近現代に軍部と共にアジア大陸

侵略に加担した教団の過去を総括する運動を進めていた。そうした見直しの中から、高木顕明に光があった。高木顕明は門徒に多くの被差別部落民をかかえ、貧しい人びとからの日露戦争への献金に反対し、公娼の設置に反対した。その顕明が大逆事件に連座、死刑判決を受け特赦で無期に減じられ、秋田監獄で自死した。高木顕明との出会いから、私の大逆事件の旅が始まった。

なぜ二四人は死刑判決を受けたのか。なぜ一二人は処刑されたのか。

なぜ思想弾圧の国家的陰謀か。なぜ名誉回復か。継ぐべき志とはなにか。

きつかけは明治天皇誕生日

大逆事件は一〇〇年前の事件である。歴史を一〇〇年戻す。

この時期、大日本帝国は朝鮮半島と「満州」の利権をめぐって中国・清との戦争（一八九四年～翌年）、ロシアとの戦争（一九〇四年～翌年）に辛くも勝ち、大韓帝国を植民地とし、帝国主義国の路線を一途に拡大する時期にあたる。

一九〇九（明治四十二年）一月三日、明治天皇の誕生日（天長節）を祝う花火が、信州・松本で打ち上げられた。松本

から犀川を下ること約一二キロ、高瀬川と合流する東筑摩郡中川手村（現・安曇野市）に国営明科製材所があった。製材所の職工長、宮下太吉（三五歳）は花火の音がかすかに聞こえるのを確認すると、夜一人下宿を出て長峰山ふもとでブリキ缶一個を投げた。大きな音と共にブリキ缶は爆発した。直径一寸（約三センチ）高さ二寸（約六センチ）、片手で簡単に握れる程の大きさのブリキ缶に火薬と小石を詰め銅線でぐるぐる巻き作ったものだ。「自分の体が吹き飛びそうな爆風と、耳を聳するほどの爆音がおきた」と宮下はのちに述べる。ただし事件発覚後、捜査当局が実地を検証したが、場所を特定できない程の爆発であった。

宮下は天長節の九カ月前、東京・巣鴨の平民社を訪ね、幸徳秋水らに面会した。宮下は『平民新聞』を読み社会主義に関心を深めたが、その新聞を創刊した社会主義のリーダー幸徳秋水に対し、爆裂弾を天皇の馬車に投げつける計画を打ち明けた。しかし秋水は次のように答えただけであった。「いざればそのような必要があるかもしれない。今後はさようなことをやる人も出てくるでしょうな」。どこか他人事のような、消極的な返事に宮下はがっかりしたという。このとき、宮下は菅野須賀子（二九歳。本名すが、のちスガ。社会主義者になってから筆名須賀子、個人全集のタイトルも筆名を採用）、新村忠雄と出会う。

この年の六月、宮下は愛知県から明科へ赴任する途中、再び東京の平民社に立ち寄り一泊、このとき、秋水と一緒に暮らす管野須賀子から爆裂弾計画の賛同を得た。

宮下は、爆裂弾の火薬となる鶏冠石を以前働いていた愛知県の知人から、塩素酸カリは新宮の医師大石誠之助の元に一時滞在していた新村忠雄から医療用を入手、混合比率は新村が秋水から聞きとり、宮下へ伝えた。

長野県松本警察署は、転職してきた宮下を社会主義者名簿にリストアップした。明科駐在所の警察官は明科製材所内に捜査協力者を潜り込ませ、その情報から宮下が汽缶職工（にっく）新田融（三〇歳）にブリキ缶二四個を作らせた事実を突き止め、松本警察署に報告。また宮下が同僚の内妻と関係を選び、宮下がこの同僚にブリキ缶や爆発物調合剤などを預け、最近製材所内に隠したことを、その同僚への事情聴取から突き止めた。

五月二五日（一九一〇年）、警察は製材所内を捜索、ブリキ缶などを発見し、宮下、新田ら五人を爆発物取締罰則違反で逮捕した。この明科事件が大逆事件の端緒となった。

平民新聞・幸徳秋水

宮下といっしょに逮捕された新村忠雄（二三歳）は長野県屋代町（現・千曲市）の豪農出身。キリスト者として洗

礼を受け、『平民新聞』を読んで社会主義にふれ、平民社に入入りした。兄新村善兵衛は弟に頼まれ、薬剤を調査する薬研（やげん）を宮下に送っただけで逮捕された。宮下が下宿に残した手紙のあて先から園丁古河力作（りきやく）の存在が判明、古河も東京で逮捕された（福井県出身で同郷の作家・水上勉が『古河力作の生涯』を書いた）。

宮下と新村は明治天皇暗殺計画を「自供」、罪状が大逆罪に変わった。大逆罪は、一九〇七（明治四〇）年制定の刑法七三条「天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太子孫ニ対シ危害ヲ加エ又ハ加エントシタル者ハ死刑ニ処ス」。特徴は計画だけで死刑になることである。長野地裁検察正は東京大審院・松室致検事総長へ事件を報告し、すぐに東京から検事が赴いた（当時、検察は裁判所の中にある司法と行政が未分離で密着していた）。

五月三一日、長野地裁は先の五人と幸徳秋水と管野須賀子の合計七人を大逆罪で管轄の大審院検事総長へ送致（起訴）した（秋水は翌六月一日、湯河原で身柄を確保、管野須賀子は出版法違反で服役中の市ヶ谷の東京監獄で東京地裁検事の取り調べを受けた）。

幸徳秋水は社会主義者（三九歳）。本名伝次郎。土佐中村で生まれ、中江兆民ら自由民権運動の影響を強く受けて育ち、『万朝報』（ばんていほう）で新聞記者、社会民主党の結成に参加。

日露戦争を前に、日露開戦論に転じた『万朝報』を堺利彦と共に退社し、『平民新聞』を創刊。「多数人類の完全なる自由、平等、博愛を以て理想」と高らかに宣言し、非戦論を鮮明に訴えていた。菅野須賀子は、大阪生まれ、社会主義思想に近づき上京して平民社を訪問、やがて紀州田辺の『牟婁新報』記者となり荒畑寒村と結婚した。寒村が赤旗事件で獄中に拘束された間に秋水と同棲を始め、大逆罪で送致（起訴）されるに至った。

二四人に死刑判決

大逆事件は全国に飛び火、取締当局は社会主義者や無政府主義者数百人を取り調べた。キーワードは「十一月陰謀」。秋水と天皇暗殺謀議をしたとされた人びとを次々に検挙した。

明科事件が発覚する二年前の十一月、東京の秋水宅で、紀州新宮から上京した大石誠之助が雑談し、大石は大阪を経て新宮に帰ったが、大阪や新宮で知人たちに秋水との「みやげ話」を伝えた。秋水の「決死の土を募る相談」との話が天皇暗殺謀議とされた。

七月。紀州新宮では、アメリカ帰りの医師・大石誠之助を中心に、熊野川上流の請川村で木材を流すイカダ師を労働組合に組織しようとした成石平四郎（二八歳）と勘三郎

（三〇歳）の兄弟。『牟婁新報』記者・崎久保誓一（二四歳）、『牟婁新報』新宮支局を一時置いた浄泉寺の真宗大谷派住職・高木顕明（四六歳）、妙心寺派の僧侶・峯尾節堂（二五歳）が七日から一四日にかけて、予審請求（起訴）された。

八月三日、熊本では月刊二回の新聞『熊本評論』の発行兼編集人・新美卯一郎（二八歳）とスポンサーの松尾卯一太（二七歳）、佐々木道元（二二歳）、飛松与次郎（二二歳）が予審請求（起訴）された。大阪では『大阪平民新聞』のち日本平民新聞』を組織していた森近運平（二八歳）や岡本顕一郎（二八歳）、三浦安太郎（二二歳）、武田九平（三五歳）が検挙された。このほか、神奈川県箱根にある曹洞宗林泉寺の住職・内山愚堂（三六歳）は『無政府共産』を秘密出版し皇太子暗殺を企てた容疑で逮捕された。結局、大逆罪で起訴された人数は二六人に上った。

明科事件が発覚して半年後、大審院特別刑事部は公判を開き、一二月一〇日から二九日までのわずか三週間、一六回のスピード審理、一人の証人尋問もなく、傍聴人を閉め出した閉鎖法廷で幸徳秋水らを裁いた。

新宮出身の高木顕明らの弁護を、歌人と謝野鉄幹と晶子夫妻が仲介し、歌人でもあった弁護士平出修が担当した。平出修の法律事務所には、親友の石川啄木（当時、朝日新聞の校正係）が頻繁に訪れ、大逆事件の資料を書き写して

いった。平出は「事件には何処で、何日、何をという三つが欠けており、只一場の夢物語に過ぎない」と反論した。

明けて一九一一年（明治四四年）一月一八日、鶴丈一郎裁判長は秋水ら二四人に死刑判決。残る二人（宮下にブリキ缶製造を依頼された新田融は懲役二年、薬研を手配した新村善兵衛は懲役八年）に爆発物取締罰則違反で有期刑の判決を下し、裁判は一審だけで終結した。

翌一九日、明治天皇の特赦で死刑判決の半数が無期に減刑されたが、死刑判決からわずか一週間後（二四日）幸徳秋水ら一人がおよそ三〇分間隔で絞首刑に、菅野須賀子のみ翌日に処刑された。

死刑のわずか一週間後、作家徳富蘆花は、旧制一高で講演した。「諸君、幸徳君らは時の政府に謀叛人と見做され殺された。諸君、謀叛を恐れてはならぬ。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人になるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である」。

大石誠之助（ドクトル（毒とる）とのニックネームをもつ）と父親が同じ職業医師で、二人に親交があった、新宮出身の作家佐藤春夫は犠牲者を悼む詩『愚者の死』（一九一一年）を書く。「大石誠之助は殺されたり／『偽より出でし真実なり』と／絞首台上の一語その愚を極む／聞く、わが郷里なる紀州新宮は恐懼せりと」

また大石と親交のあった与謝野鉄幹も逆説的な表現ながら誠之助の死を嘆いた。「大石誠之助は死にました／人の名前に誠之助は沢山ある／然し／然し／わたしの友達の誠之助は唯一人／わたしはもうその誠之助に逢はれない」（一九一一年四月『三田文学』）。

大逆事件の三年前（一九〇七年）の天長節、サンフランシスコの日本領事館に「無政府党革命党暗殺主義者」を名乗り天皇制をストレートに批判する文書が貼り付けられ、日本政府を震撼とさせたことがあった。大逆事件は、元老山縣有朋が社会主義者や無政府主義者の一掃を狙った思想弾圧策であり、当時、司法省民刑局長兼大審院次席検事の平沼騏一郎（のち総理大臣、東京裁判でA級戦犯として終身刑の判決）が明科事件をきっかけに全国に捜査網を拡げ、大逆事件全体の構図を描いたと、戦後の研究は明らかにしている。

五〇年目の再審請求

大日本帝国はアジア・太平洋戦争に敗北し、象徴天皇制の日本国憲法の時代になっても大逆事件の関係者に春は訪れなかった。

一九六〇年。ちょうど日米安保条約をめぐる、反対運動が盛り上がっていた時期、大逆事件の再審請求をめざし

弁護士や研究者らが「大逆事件の真実をあきらかにする会」を結成した(二月二三日)。また、刑死五〇周年に当たる一月二四日前後、記念祭が全国各地で催され、秋水の出身地土佐中村では記念講演会に二〇〇〇人の聴衆が参加、六人の犠牲者を出した新宮でも墓参りなど記念行事が催された。

「あきらかにする会」の趣旨書で、研究者・神崎清は次のように高らかに宣言した。

「大逆事件は生きている。天皇の人間宣言、日本国憲法の主権在民、基本的人権、戦争放棄のなかに、虐殺された幸徳秋水らの理想が生きている。われわれは、日本民主化の捨石となった先覚者の血文字を忘れないであろう」

「あきらかにする会」ニュース二号には、新宮出身の作家佐藤春夫が新宮の犠牲者と関係深いメンバーと開いた座談会が掲載された。佐藤春夫が「大石誠之助は洒脱な冗談ばかりをいって面白い人だと記憶していることや、春夫の父(医師)のところ月に二度、三度来ては患者の噂や医学上の話をしていたこと」と証言した。

翌一九六一年一月一八日(大逆事件の判決日)、東京高裁に大逆事件の再審を請求したのは、いったん死刑判決を受けた(特赦で無期)坂本清馬(二五歳)と、もう一人、森近運平の妹・栄子だ。弁護士は、宮下、菅野、新村忠雄、古河、

秋水ら五人に一定の計画があつたとしても、事件全体はフリュームアップだと、二人の無実を主張した。

再審請求から四年後、東京高裁は棄却を決定した(一九六五年一月一日決定、一〇日送付)。すぐに請求人は最高裁に憲法違反を理由に特別抗告する一方、この高裁で再審事件を担当した長谷川成二裁判長を国会の裁判官訴追委員会に対し訴追を請求した(翌六六年六月二日)。訴追請求状によると、東京高裁第一刑事部の長谷川裁判長は六五年一月三〇日付けで浦和地・家裁の所長に転出し東京高裁判事の身分を失い、また裁判官五人のうち上野判事は一月二九日長野県に出張尋問し東京におらず、一月二九日に合議すら開かず棄却を決定した。つまり、「裁判官五名は、合議もしないで合議があつたものとして決定書を弁護人に送付した。これは、明白に法律違反であるとともに、不真面目、不謹慎極まるものです。こう不真面目な裁判官は、断固として弾劾されなければなりません」。

最高裁(はじめ第三小法廷、のち大法廷に審理を移行)は、「本件各抗告を棄却」と決定(一九六七年七月五日)、また衆議院訴追委員会は長谷川判事を訴追しないと決定(同年一月二二日)。「あきらかにする会」は、「大逆事件については、司法関係だけでなく、立法・行政府においても、真実を発言できないのであろうか」との声明を発表、この

事件の闇の深さを暗示した。

行きつ戻りつ

再審請求は各地に波紋を拡げた。新宮ではこんな事件が起きた。新宮では、高木顕明の弁護人・平出修法律事務所
の書記、和貝彦太郎（新宮出身）ら市民有志が『幸徳秋水事
件五十周年紀南関係者追悼記念会』を開催（六〇年一月二
四日）、次いで翌年、新宮市立図書館長が会長を務める熊野
文化会は、地域雑誌『熊野誌』第六号で大石誠之助特集号
を発行した（六一年七月）。

新宮図書館長の浜畑营造が、「序にかえて」で、晴れない
冤罪へのいらだちを書いた。

「当時の裁判は如何にでつち上げであったか。多言を待
たぬ。さればとて大逆徒大石誠之助の汚名は、永久に消え
ないであろう。せめて只我々郷党の後輩は彼の足跡を調べ
て、彼の行為が如何に偉大であったかをこれら誤解の徒に
知らしめると同時に郷党の子弟にその面影を残しておきた
い」

しかし浜畑への攻撃が思いがけないところからやって来
た。浜畑が『熊野誌』次号でさらに大石誠之助の遺稿出版
を企画したところ、新宮市の教育長から横やりが入った。
遺稿集の出版は困難となり、また定例なら二期四年が当た

り前の新宮市図書館長の職を浜畑は更新されなかった。保
守系の市会議員が議会で問題にするかもしれないと、教育
長らは恐れた。

一九七一年七月、管野須賀子の石碑が東京の正春寺に建
てられた。正春寺は、新宿駅南口から甲州街道に沿って西
に徒歩一〇分ほど、東京都庁など高層ビルを目の前にした
小さな寺だ。「くろかねの窓にさし入る日の影の 移るを
守りけふも暮らしぬ」との管野須賀子が獄中で詠んだ歌が
オモテに記され、ウラには「革命の先駆者 管野スガここ
にねむる 寒村書」。管野と結婚した荒畑寒村が筆をとつ
た。寒村が赤旗事件で獄中の間、管野が秋水の許に走つた
ことを思うと複雑な感じがする（作家瀬戸内晴美が『遠い
声』で管野須賀子を描いた）。しかし二年後（一九七三年一
月）、それまで処刑日前後、正春寺で開かれていた大逆事件
処刑追悼記念集会が「今年は取りやめることにしました」
と中止になった。坂本清馬らの再審請求や長谷川成二東京
高裁判事の訴追が不発に終わり、「あきらかにする会」内部
で意見が対立した。

一九八四年、「あきらかにする会」事務局長に新しく山泉
進明治大学教授（現・副学長）が就任し、「あきらかにする
会」ニュース発行を再開するまで、一〇年余り空白が生
じた。

宗教者の名誉回復

部落差別と宗教の問題がきっかけに、宗教者の名誉回復が進む。全共闘運動が盛んな一九七〇年一月、「大逆事件」と部落差別く高木顕明の人と思想」が雑誌『部落解放』に掲載された。著者は真宗大谷派と縁の深い大谷大学全学共闘会議の議長を務めた文学部史学科の学生である。高木顕明六〇年目の再発見である。

九年後（七九年）、アメリカで開かれた第三回世界宗教者平和会議において、全日本仏教会理事長で曹洞宗宗務総長・町田宗夫が「日本に部落問題はない」「百年ほど前にあったことで今はない」と差別発言をくり返した。確認糾弾会が五回開かれ、町田は第四回世界宗教者平和会議で前回の発言を取り消し、全世界に謝罪した。

この差別発言をきっかけに、曹洞宗は実態調査を進めた。曹洞宗全国一万五カ寺のうち檀信徒に被差別部落民を含むと回答した五四六カ寺を調べ、半数近い二五一カ寺に差別戒名など差別事象の存在を確認した。こうした作業を経て、曹洞宗は内山愚堂の名誉を回復した（一九九三年八月二日）。「大逆事件の死刑僧、八三年ぶり」「宗派の戦争協力反省の取り組みの中で、愚堂の存在がクローズアップされた。『処分は政府の弾圧政策をうのみにしたもので誤

りだった』との反省文を宗報に掲載する」と毎日新聞は伝えた。

真宗大谷派でも、同和推進本部委員の泉恵機大谷大学教授が高木顕明の研究を進め、一九九二年『部落問題資料集』に顕明の経歴や顕明の論文『余が社会主義』を掲載し、翌年には「大逆事件の犠牲者・高木顕明師の名誉回復」を提起した。

顕明は門徒に被差別部落が多いため、顕明は門徒からのお布施に依存せず、マツサージを習い生活を維持した。また日露戦争で教団から強制的に割り当てられる門徒からの献金に反対。顕明は「弱者の友」に寄り添った。

高木顕明は、『余が社会主義』で貧困と向き合い、戦争に直面した門徒への思いを次のように、述べている。

「極楽世界には、他方の国土を侵害したということも聞かなければ、大義を立ててそのために大戦争を起こしたというところも一切聞いたことはない。これによって私は非戦論を論じる者である」

アジア・太平洋戦争の敗戦五〇年にあたる一九九五年、当時の宗務総長能邨英士のむら、へいしが「顕明の復権」を春の法要と秋の宗会で提案、これをきっかけに戦後五〇年の不戦決議を宗会全員一致で決議した。翌九六年四月一日、浄土真宗大谷派は、高木顕明の処分を取り消し、僧籍を回復した。峯

尾節堂についても、臨濟宗妙心寺派が名誉を回復（九六年一〇月）。これで、大逆事件に連座した仏教者三人全員が復権した。

闇から紡ぐ人と光

一九八九年昭和天皇が死去し、天皇の戦争責任論など天皇制を少しは自由に論議できる社会になった。九六年、新宮市議会では、西村伊作（大石誠之助の甥。お茶の水にある文化学院の創立者）記念館に伴う予算の質疑応答の形で、岸順三市長が「市報に名誉回復宣言を記載、記念館に大石コーナーの設置」と答弁、実施した。

九八年には顕明が住職をつとめた浄泉寺で、顕明の追悼法要・遠松忌も始まり、宗務総長をはじめ多くの真宗大谷派関係者が参加した。私は遠松忌で、高木顕明の孫にあたる高木義雄から、高木顕明の養女加代子が事件後芸者となって苦労した話を直接伺ったことがある。加代子は真宗の信仰を捨て天理教に改宗した。そんなところにも、真宗に絶望した加代子の心象風景がうかがえる（新宮出身の作家中上健次が『千年の愉楽』などで新宮大逆事件を描く）。

二〇〇〇年六月には、真宗大谷派や新宮市が主催して「人權フォーラム」を開いた。その実行委員長が、二河通夫だ。

二河は高校の英語教師から新宮市立図書館の館長をつとめた。全体のテーマを「闇から紡ぐ人と光」と決め、沖浦和光桃山学院大元学長らをパネラーにシンポジウムを開き、六〇〇人以上が参加した。新宮市が公金一〇〇万円を支出した背景には、市長が作家佐藤春夫に縁の深い佐藤春陽であったことも影響した。

同じ年、秋水の出身地、高知県の中村市（現・四万十市）議会は辛徳秋水顕彰を決議（二〇〇〇年二月一九日）。

話を新宮に戻すと、二河が会長となって翌二〇〇一年八月、「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」が発足し、翌月、新宮市議会は「大逆事件の名誉回復宣言」決議を全会一致で可決。二〇〇四年、新宮市の北、成石兄弟の出身地の本宮町（現・田辺市本宮町）でも「大逆事件犠牲者の名誉回復を実現する会」がスタート、町議会で名誉回復を宣言、地方議会での名誉回復は拡がった。「いま、わが町は、暗黒の闇に眠る成石兄弟はじめ紀南の先覚者たちの名誉を回復し、顕彰することを宣言する」。

司法の自己批判

大逆事件一〇〇年を迎え、新宮青年会議所が主催してシンポジウムを開き（二〇一〇年四月二九日）、大石誠之助らをモデルにした小説『許されざる者』を書いた作家の辻原

登が「過去をきちんと伝えなければいけない」と記念講演をした。第二部のパネルディスカッションで、佐藤春夫記念館館長の辻本雄一がある文章を聴衆に読み上げた。シンポに先立ち、「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」会長の二河通夫が辻本に読み上げたら聴衆の関心を引くのではないかと、サジェスチョンを与えた文章である。

ちよつと興味深い文章なので引用する。それは、作家・夏樹静子の連載『裁判百年史ものがたり』（『オール讀物』文藝春秋）が単行本として刊行されるにあたり企画された、最高裁長官をつとめた島田仁郎との特別対談だ。

「夏樹静子：第二回に大逆事件を書きました。これは大津事件とは対極にあるケースです。

裁判が非常に迅速に行われて、非公開の裁判であつという間に二十四名の死刑判決が下されます。これは、証拠無視の思想弾圧といわざるを得ません。

島田仁郎：裁判官OBとして、この裁判はいわば負の遺産ですし、非常につらい思いで読むことになります。大逆事件は、当時の刑事裁判制度が抱えていた問題点が全て出ています。捜査における拷問などの人権侵害、予審による職権的、糾問的な手続、広範囲にわたる裁判の非公開、計画・謀議をも処罰対象にする刑法のあり方など、制度的な問題が全てあらわれている。現代ではありえないようなこ

ととはいえ、こういう裁判があつたことを、忘れてはいけないし、いつでも反省材料にしなければいけません。唯一の救いは、弁護士は非常に自由にものを言わせてもらったことです」

最高裁の長官経験者ですら大逆事件についてこれほどの問題点を列挙したのを受け、二〇一〇年五月二二日、二河通夫ら「顕彰する会」は大石誠之助を新宮市の名誉市民へ推挙する決議を市長に求めた。が、市長は「一般市民の理解を得られていない」と見送りを表明した。天皇暗殺計画の謂われのない容疑は、百年経つても重い。

二河通夫会長の「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」の顕彰碑『志を継ぐ』は宣言する。

「これらの人びと（大逆事件の犠牲者）は、平和・博愛・自由・人権の問題において、むしろ時代の先覚者であつた。こうした彼らの志は、いまに生きるわれわれにも当然受け継がれるべきものと確信する」

（被告人の年齢は判決時。文中敬称略）

にしむら・ひでき

一九五一年名古屋生まれ。慶應義塾大学経済学部卒、毎日放送で放送記者など。

著書に「北朝鮮・闇からの生還〜第十八富士山丸スパイ事件の真相」光文社、一九九七年、これを文庫化した「北朝鮮抑留〜第十八富士山丸事件の真相」岩波現代文庫、二〇〇四年、大阪で闘った朝鮮戦争〜吹田・枚方事件の青春群像（岩波書店、二〇〇四年）など。